

享保6年松岡藩併合に伴う武家屋敷地の変遷* 福井城下の武家地の研究 その34

伊豆蔵 庫喜^{*1}, 吉田 純一^{*1}, 多米 淑人^{*2}

The Change of the Samurai's Premises with the Matsuoka Feudal Chan in Kyoho 6 Years A Study on the Samurai's Premises of the Fukui Castle Town, Part 34

Kouki IZUKURA^{*1}, Junichi YOSHIDA and Yoshihito TAME

^{*1} FUT Fukui Castle and Castle Town Research Laboratory

This paper considers the change in the Samurai's Premises of the Fukui Castle Town with the Matsuoka Feudal Clan merger of Kyoho 6 years. The Matsuoka Clansman in Enpo 4 years was 189 peoples. The old Matsuoka Clansman who was able to pinpoint an emigration place was 111 peoples. The Matsuoka Clansman who emigrated to Joto district and Keya-cho was 107 peoples. The period required for emigrated was 16 years in Genbun 4 years from Kyoho 8 years. The premises of the Clansman whom I emigrated to are not equal with the premises that became the vacant land by the salary reduction of Jokyo 3 years.

Key Words : 松岡藩併合, 番外藩士, 番組藩士, 移住者, 毛矢町, 新屋敷

1. はじめに

福井城下の武家地における敷地数は、藩の動向によって大きく左右され、特に貞享3年(1686)の大法⁽¹⁾直後と享保6年(1721)の松岡藩併合⁽²⁾を期に2度大きな変化が認められる。既報⁽³⁾では、前者の貞享の大法に伴う武家屋敷地の変動について報告した。その結果、大法によって暇を出された家臣(以後、罷免者)の屋敷地は城下周辺部の新屋敷、城ノ橋、勝見外町、毛矢町に集中しており、城下中心部の大名町や下馬門前には少なかったこと、罷免を免れた高田小左衛門や奈良左近右衛門らは毛矢町に住んでいたが大法によって空屋敷地になった城下中心部に転居していたこと、さらにこれまで大法直後に多くの武家屋敷地が空屋敷地や畑地になり、その後、松岡藩士の移住によって武家屋敷地に戻ったと伝えられていたが、橋北の武家屋敷地に限っては、それ以前の貞享3年～正徳4年の間に武家屋敷地に戻されていたことなどを明らかにした。

本稿は享保6年の福井藩への併合に伴う松岡藩士の拝領地を検討し、これらの移住に伴い貞享3年以降、明地や地方地、畑地に変貌した福井城下の武家屋敷地がどのように移変したのかを考察する。なお、本稿においても下級武士にあたる御徒や小役人などは対象外とする。

2. 松岡藩士について

2.1. 家格と役職、禄高

延宝4年(1676)頃の松岡藩士の数は、島田和三郎家所蔵の『松岡様御給帳』⁽⁴⁾で確認でき、医師や諸役などを含めると189名である。これら189名を家格別に氏名、職名、禄高を示したものが表1である。

* 原稿受付 2017年2月21日

^{*1} FUT 福井城郭研究所

^{*2} 建築土木工学科

E-mail: kouki-i@fukui-ut.ac.jp

表1 松岡藩士の職名と禄高(延宝4年)および福井併合後の移住先の町名と敷地番号(その1)

【番外藩士】					【番組藩士】				
職名	禄高	氏名	町名	敷地番号	職名	禄高	氏名	町名	敷地番号
家老	500	中根勘負	土居ノ内	Do-13	中頭	100	伊藤十之進		
	400	秋田八郎兵衛	永平寺町	Ei-7	中頭	100	猪子三郎左衛門	新屋敷4	
	400	明石縫殿	新屋敷1	S1-A1	中頭	100	藺田七郎	新屋敷3	
	400	松原郷右衛門			中頭	100	三岡数馬	毛矢町	KY-45
御城代	400	雨森傳右衛門	神明前	Si-8		200	相沢六郎右衛門	新屋敷4	S4-C2
	300	渋谷弥祝	御泉水町	OS-13		250	白石主水	毛矢町	KY-5
御番頭兼御奏者	250	中川主膳	毛矢町	KY-29		150	奈良助右衛門	毛矢町	KY-21
	250	磯野多宮	御泉水町	OS-13		100	沢木所右衛門	毛矢町	KY-1
	250	秋田勘解由	新屋敷1	S1-A1		100	雨森藤右衛門	毛矢町	KY-9
御奏者兼江戸御用多取	200	生駒四郎左衛門	毛矢町	KY-13	奥御小姓	150	田辺右金吾	新屋敷2	S1-C2
御奏者兼御小姓支配	200	青山登	新屋敷1	S1-B1		100	蜷川三五右衛門	新屋敷2	S2-B1
御奏者	200	蜷川七郎兵衛	毛矢町	KY-11		100	岡部右門	毛矢町	KY-3
御奏者見習	60俵5人扶持	雨森三右衛門	毛矢町	KY-9		100	森田庄左衛門	新屋敷2	S2-B10
寺社町郡奉行	250	尾高治郎右衛門	毛矢町	KY-10	御祐筆	100	永田一郎右衛門		
寺社町郡奉行	200	佐々木大之進	新屋敷1	S1-D6		100	一柳段四郎	新屋敷3	
算奉行	200	浅井源左衛門	毛矢町	KY-50		100	沢木彦一郎	毛矢町	KY-2
算奉行	200	雨森新七	毛矢町	KY-9		50	高屋治右衛門	奥東光寺町	
算奉行	200	津田与三衛門	新屋敷5	S5-C14		50	藺田左仲		
御旗奉行	150	小林久兵衛	毛矢町	KY-18	御小姓	100	生駒傳	新屋敷1	S1-C3
御持簡頭	200	村浦宮内左衛門				100	田辺十蔵		
御先武頭	200	佐治新五左衛門	新屋敷6	S6-F13		50	雨森源四郎	城ノ橋5	J5-A5
御目付	200	横田兵蔵	新屋敷1	S1-D6		150	村田新八		
御目付	200	丹波八郎	新屋敷3	S3-C14		25石5人扶持	小林品右衛門		
御目付	200	片山弥五右衛門				25石5人扶持	高久他三郎	新屋敷2	S2-C14
	200	平本佐野右衛門			福井御下屋敷預り	25石4人扶持	木村佐太郎		
御先武頭	200	土屋小弥太	毛矢町	KY-1	御武具奉行	20石5人扶持	栗田七郎右衛門	毛矢町	KY-4
御普請奉行	100	磯野無二	新屋敷1	S1-D11		20石5人扶持	吉田弥十郎		
無役	200	片山与三右衛門	新屋敷1	S1-D5		20石10人扶持	久津見左源太	新屋敷4	S4-C8
御徒頭	100	久世少吉	新屋敷1	S1-C6		20石10人扶持	諸木野半之助	新屋敷2	S2-C9
御徒頭	100	河合彦作	新屋敷1	S1-A1		20石10人扶持	蜷川熊之助		
御近習目付	100	加藤忠兵衛	毛矢町	KY-16	御小姓	20石7人扶持	猪子小六		
無役	100	久津見多仲	毛矢町	KY-46	御武具奉行	20石5人扶持	村尾武太夫	新屋敷	
	150	梯左仲左	毛矢町	KY-6		20石5人扶持	成瀬免毛	毛矢町	KY-28
御長柄奉行	150	神戸六左衛門	新屋敷1	S1-D4		20石5人扶持	吉田伊兵衛	毛矢町	KY-33
無役	50石5人扶持	金子六左衛門	毛矢町	KY-40		20石5人扶持	小川又左衛門	新屋敷2	S1-C9
江戸御留守居	200	野月八郎右衛門			中奥付	20石5人扶持	平井三左衛門	新屋敷2	S2-D5
江戸御留守居	200	大谷万右衛門				20石5人扶持	中村庄内	新屋敷1	S1-B2
御膳番	100石3人扶持	前波多門	新屋敷1	S1-D6	定江戸	20石4人扶持	吉樹多膳	東光寺町	
御膳番	100石3人扶持	波多野造酒	新屋敷1	S1-C5	御代官	20石4人扶持	高橋又左衛門	新屋敷1	S1-A1
御膳番	25石5人扶持	笹川宮内	新屋敷1	S1-C4		20石4人扶持	永田忠四郎	新屋敷3	
						20石5人扶持	伊藤助十郎	毛矢町	KY-40
						20石4人扶持	大谷傳七	毛矢町	KY-36
					定江戸	20石5人扶持	佐野内半郎	新屋敷2	S2-B9
						25石5人扶持	青山久内	新屋敷4	S4-C10
						25石4人扶持	木村丹郎	新屋敷1	S1-D7
					小納戸御膳物	25石4人扶持	河村市郎	新屋敷1	S1-B1
					定江戸	25石4人扶持	桜井藤七	新屋敷2	S2-C5
						20石4人扶持	吉岡伝吾	新屋敷1	S1-B2
						17石4人扶持	岡谷嘉傳		
						20石4人扶持	市村喜六	新屋敷3	S2-C4
						25石5人扶持	坂巻弥次兵衛	毛矢町	KY-45
					御祐筆	20石4人扶持	永田助三		
					御台所頭	17石4人扶持	田辺奥左衛門	新屋敷1	S1-D7
						25石4人扶持	内海三六		
					道奉行	20石4人扶持	西村閑明	毛矢町	KY-14

表1 松岡藩士の職名と禄高(延宝4年)および福井併合後の移住先の町名と敷地番号(その2)

職名	禄高	氏名	町名	敷地番号
	18石4人扶持	樋口三郎助	新屋敷2	S1-D6
		沢田丈左衛門	毛矢町	KY-38
	25石4人扶持	三上勝七	毛矢町	KY-8
大納戸	20石4人扶持	久津見庄蔵	毛矢町	KY-48
	17石4人扶持	中村弟蔵	東光寺町	
		井沢三内		
	17石5人扶持	山田弥次郎	新屋敷6	S6-F5
	20石4人扶持	岡崎蔵左衛門		
	20石5人扶持	上坂興七		
小納戸御腰物	12石3人扶持	久野忠左衛門	新屋敷2	S2-C13
御番頭	20石4人扶持	茂木清太夫	毛矢町	KY-12
	10石4人扶持	山本庄七	毛矢町	KY-13
	20石4人扶持	三塚三郎左衛門		
		青山幸八		
御代官	23石4人扶持	芦田八郎左衛門	新屋敷1	S1-A1
御小姓	20石4人扶持	筒井左内	新屋敷1	S1-C2
御祐筆	20石4人扶持	波々伯部市九郎	新屋敷3	
御作事奉行	20石4人扶持	牧野嘉兵衛	新屋敷	
御金奉行納方	20石4人扶持	石川金吾	毛矢町	KY-35
家老祐筆	20石4人扶持	大河原作右衛門	毛矢町	KY-15
大工頭	17石5人扶持	山形三五右衛門	毛矢町	KY-31
	17石4人扶持	口川友右衛門		
	15石4人扶持	伴才右衛門	毛矢町	KY-27
御祐筆	25石5人扶持	高楷彦六	毛矢町	KY-45
		川端勇左衛門	新屋敷2	S2-C6
御小姓	25石5人扶持	伊藤波面		
中奥付	20石4人扶持	野中十左衛門		
	10石4人扶持	吉倉文蔵	毛矢町	KY-51
御金奉行払方	18石5人扶持	武沢条助	東光寺町	
	10石3人扶持	口川文右衛門		
	3人扶持	山崎十之助		
	17石4人扶持	桧川団右衛門		
	18石4人扶持	伴権太夫	新屋敷4	
御勘定方吞込	22石4人扶持	加藤源助		
	15石4人扶持	星野石門作	毛矢町	KY-33
	3人扶持	酒俣亀太郎		
	17石3人扶持	長野徳右衛門		
	20人扶持	笹倉善左衛門	毛矢町	KY-5
御馬別当	20人扶持	伊藤惣八	新屋敷1	S1-D12
定江戸	23石3人扶持	横川走八		
	17石4人扶持	中村源兵衛		
御勘定方吞込	22石4人扶持	加藤清兵衛	新屋敷2	S1-C2
	70俵	酒井甚内	毛矢町	KY-17
	17石4人扶持	山口軍侶		
	12石3人扶持	小林忠兵衛	毛矢町	KY-51
	20石4人扶持	新海右内	新屋敷6	S6-F10
京都御用御金方	30人扶持金30両	永屋藤馬		
	17石4人扶持	羽中田定七	城ノ橋	
	15石4人扶持	岩城庄八	奥東光寺町	
御祐筆	25石5人扶持	大河原丈太夫		
定江戸	17石4人扶持	中村九蔵		
		稲葉左織		
	15石3人扶持	上坂利左衛門	新屋敷3	
	20石4人扶持	安本新助		
	17石4人扶持	武沢弟七	城ノ橋	

職名	禄高	氏名	町名	敷地番号
京都御金御用	17石4人扶持	田村弁左衛門		
		沢田条右衛門	毛矢町	KY-35
江戸作事奉行	20石4人扶持	小林興五太夫		
定江戸	20石5人扶持	佐田臈右衛門		
御勘定方吞込	17石4人扶持	山内六兵衛		
中奥付	15石4人扶持	半木兵助		
	17石4人扶持	桜井甚七		
御馬乗	15石3人扶持	町田藤右衛門	奥東光寺町	
耕作方	15石4人扶持	米岡喜衛		
大納戸	20石4人扶持	原治兵右衛門		
御台所頭	17石4人扶持	佐治勘右衛門	奥東光寺町	
用水方	15石4人扶持	石沢忠右衛門	奥東光寺町	
御側小姓	20石5人扶持	村浦斎宮		
御料理人	15石3人扶持	村田新六		

【番外医師】

	200	細井玄春		
	60俵	引間玄節	城ノ橋4	J4-B14
	70俵	内海道安	毛矢町	KY-2
	100	細井玄養	新屋敷1	S1-B1
	5人扶持	村 秀伯		
	15人扶持	安田伯元		
外科	30人扶持	前田道通	新屋敷1	S1-A1
	7石5人扶持	佐野玄宅		
小児	100	三崎宗元		
針	20石5人扶持	引場玄泰		
針	15石3人扶持	小関玄安		
針	9石6斗3人扶持	佐々木貞雄	毛矢町	KY-4

【番組医師】

外科	15石5人扶持	原田元隆	毛矢町	KY-35
外科	15石5人扶持	栗崎啓祝		
外科	50石5人扶持	庵原松屋		
針	15石5人扶持	吉田貞庵	毛矢町	KY-10
御茶乃御坊主頭	15石5人扶持	藤田宗磐	新屋敷1	S1-C6
	15石5人扶持	岩佐瑞雲	新屋敷3	

【諸役】

馬医方	15石3人扶持	森崎惣右衛門		
	10両2歩5人扶持	松下文右衛門		
謡小 打	10両2歩5人扶持	本多丹右衛門		
	15石3人扶持	高橋久太夫		
御膳付	15石3人扶持	跡部多助	新屋敷2	S2-C2
		三寺権右衛門		
	15石3人扶持	波々部猪明		

表1において、「番外」40家が上級武士にあたり、これに次ぐ124名が「番組」で、これら164名の士族によって松岡藩の家臣団が構成されている⁽⁵⁾。

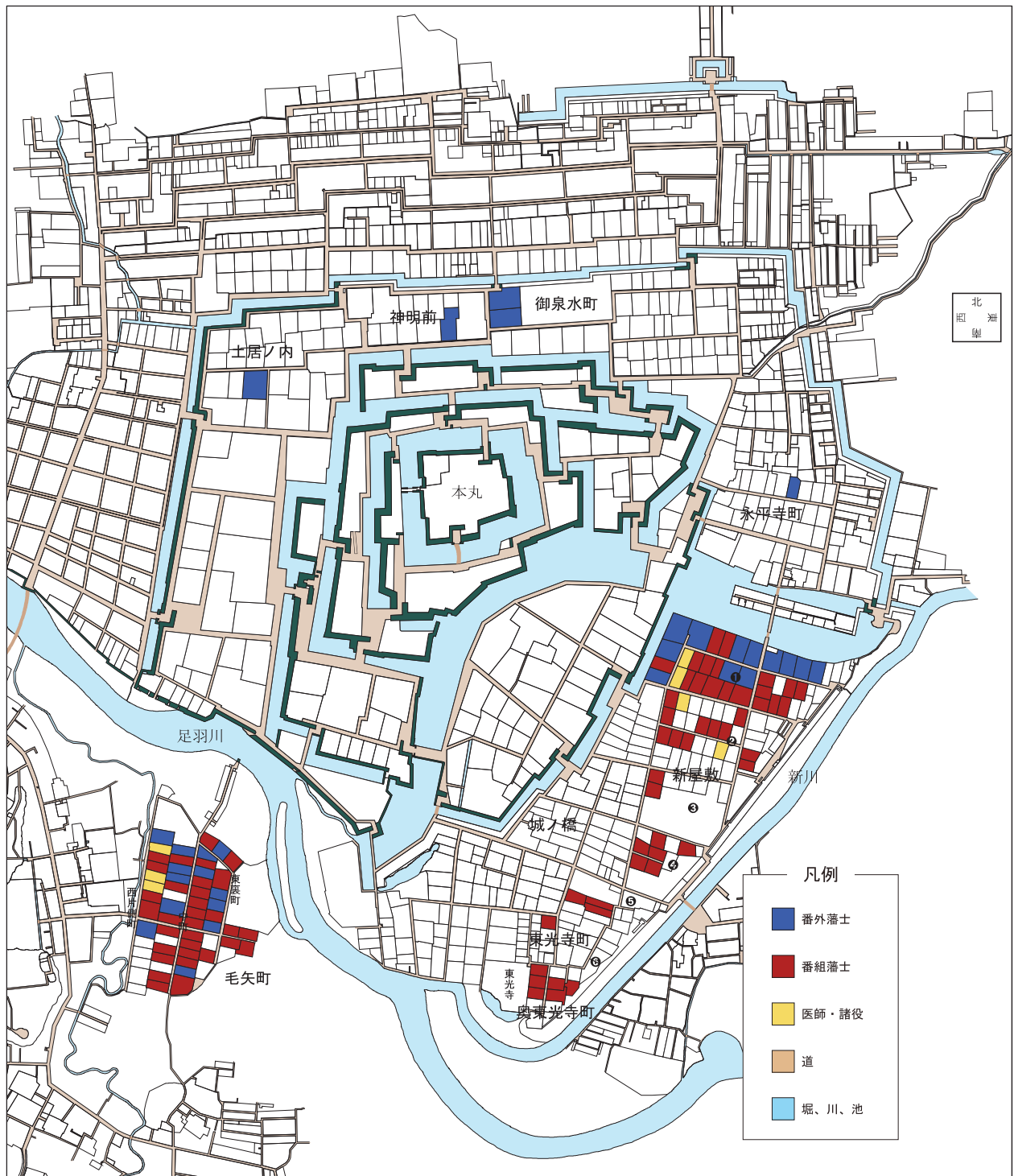


図1 松岡藩併合に伴う移入者の屋敷地

(享和3年の『福井分間之図』を基に作図した)

2.1.1. 番外藩士

松岡藩の最上級家格である番外40家は、家格によって役職も区別されていた。例えば、「家老・城代」に就けるのは中根鞆負家、秋田八郎兵衛家、明石縫殿家、松原郷右衛門家、雨森傳右衛門家の5家のみで、これに次いで「番頭・奏者・寺社奉行」に就くことができる家は、渋谷弥祝家や磯野多宮家など10家である。

それ以外の浅井源左衛門家や雨森新七家など25家は「算奉行・目付・徒頭・膳番」などの職に就いていることから、概ね3段階に分けられていたことになる。

禄高は、家老級の中根家、秋田家などの5家は、中根家の500石を筆頭に、いずれも400石である。次いで番頭級の10家は、渋谷家のみが300石で、それ以外の9家は200石～250石である。一番下位にあたる算奉行級のほとんどの家が100石～200石であり、浅井源左衛門家をはじめとする25家は松岡藩（5万石）では上級藩士に属するが、これまでみてきた福井藩（25万石）の狛家や芦田家などの上級藩士の大半が1000石を超える禄高を有しており、本藩と分藩では藩士の俸禄に関しても違いがあった。

2.1.2. 番組藩士

番組124家も番外同様、家格や禄高によって2段階に区分され、伊藤十之進家や猪子三郎左衛門家ら20家が「中頭・奥小姓・祐筆」に就き、それ以外の104家が御代官や作事奉行および台所頭などの職に就いている。

禄高についても前者と後者ではかなりの格差があり、中頭の伊藤十之進家や猪子三郎左衛門家ら18家がおおよそ100石～250石であるのに対して、御武具奉行の栗田七郎右衛門家や村尾武太夫家などは50石以下である。

2.1.3. その他

以上164名の士族のほか、細井玄春や引間玄節など「番外医師」が12名、原田元隆や栗崎啓祝など「番組医師」が6名、森崎惣右衛門や松下文右衛門ら「諸役」が7名みられる。

3. 福井移住後の屋敷地について

3.1. 屋敷地の位置

以上の松岡藩士189名について、安永4年（1775）の『御城下絵図』^⑥（以下、『安永城下絵図』）や享和3年（1803）の『福井分間之図』^⑦ および天保2年（1831）の『御家中転宅考』^⑧（以下、『転宅考』）などにみられる名前に対照できるのは、そのうちの123名である。享保6年の併合以降、これら123名が福井城下に移住した町名を表1に示した。

図1はこれら123名の屋敷地を、享和3年（1803）の『福井分間之図』に示したもので、番外の屋敷地は青色、番組の屋敷地は赤色、医師や諸役の屋敷地は黄色で表している。

3.1.1. 番外藩士

図1において、番外の屋敷地が特定できるのは34筆である。最も多い地域は、城下の東南隅の新屋敷で16筆みられる。このうち新屋敷^⑨ ①区が13筆と多く、北端の比較的広めの屋敷地を家老級の明石縫殿（400石）や秋田勘解由（250石）、御奏者の青山登（200石）らが拝領している。それ以外は新屋敷③区に御目付の丹波八郎（200石）、⑤区に算奉行の津田与三衛門（200石）、⑥区に御先武頭の佐治新五左衛門（200石）の屋敷地が確認できる。但し、個々の屋敷地の大きさは、北端の明石家や秋田家などの敷地よりも小さめである。

新屋敷に次いで、足羽川を隔てた橋南の毛矢町に13筆みられる。13筆中10筆が御番頭の中川主膳（250石）や寺社町郡奉行の尾高治郎右衛門（250石）、御奏者の生駒四郎左衛門（200石）など100石を超える家であるが、一部無役の金子六左衛門（50石5人扶持）や御奏者見習の雨森三右衛門（60俵5人扶持）ら小禄の者も含まれる。

したがって、番外の屋敷地は、新屋敷（16筆）と毛矢町（13筆）で29筆（85%）あり、これら2町に集中していることが指摘できる。

このほか少数であるが、本丸の西北側の土居ノ内に筆頭家老の中根鞆負（500石）、その東隣の神明前に御城代の雨森傳右衛門（400石）、御泉水町に渋谷弥祝（300石）と磯野多宮（250石）の屋敷地がある。

3.1.2. 番組藩士

番組藩士の屋敷地を特定できるのは、赤色で示した80筆である。番組の屋敷地もやはり毛矢町と新屋敷に多く、毛矢町は中頭の三岡数馬（100石）や白石主水（250石）など30筆の屋敷地がみられる。

新屋敷は最多の39筆が⑤区を除く全区域に点在している。例えば、新屋敷①区には御小姓の生駒傳（100石）や中奥付の中村庄内（20石5人扶持）などの屋敷地が10筆、②区には奥御小姓の田辺右金吾（150石）や蜷川三右衛門（100石）など13筆の屋敷地が確認できる。さらに同じ区域にある城ノ橋に3筆、東光寺町に6筆、奥東光寺町に2筆みられる。これら4町の筆数を合わせると50筆になり、番組全体の約6割を占めている。

一方、前述した番外の屋敷地が4筆あった城下中心部には、番組の屋敷地は1筆もみられない（図1参照）。したがって、番組の屋敷地は橋南の毛矢町と新屋敷を含む城東地区のみ限られていたことが指摘できる。

3.1.3. 医師・諸役

黄色で示した医師や諸役の屋敷地は9筆ある。毛矢町には番外医師の内海道安（70俵）と針士の佐々木貞雄（9石6斗3人扶持）、番組医師で外科の原田元隆（15石5人扶持）と針士の吉田貞庵（15石5人扶持）の医師2名と針士2名の計4筆の屋敷地がある。

一方、新屋敷には5筆あり、こちらも番外医師で外科の細井玄養（100石）と同じく外科の前田道通（30人扶持）の2筆と番組医師で御茶乃御坊主頭の藤田宗盤（15石5人扶持）と岩佐瑞雲（15石5人扶持）の2筆のほか、諸役の跡部多助の屋敷地である。このうち、医師については、新たに松岡藩士の居住区になった毛矢町と新屋敷に番外医師と番組医師がそれぞれ配されている。

3.2. 福井移住の期間

併合後の享保7年（1722）に福井城下で明地になっていた城東一帯（後の新屋敷）や毛矢町に松岡藩士の屋敷地が移されることになった。その後は『続片聾記』⁽¹⁰⁾に「享保十巳年 一、同三月五日松岡御家中屋舗を福井へ引移に付、中根鞆負、秋田八郎兵衛、御目付片山弥五右衛門え被ニ。」⁽¹¹⁾と「一、十月十九日松岡御屋形并御家中連々福井へ御引取被成度旨、六郷主馬殿を以御願」⁽¹²⁾とあることから、享保10年（1725）3月5日に福井への引越について中根鞆負や秋田八郎兵衛に、具体策を計画させ、10月19日には幕府に対して松岡の御館ならびに藩士の福井への引き取りを願い出ている。

3.2.1. 毛矢町

毛矢町への移住については、『続片聾記』に「享保十六亥年 一、同七月廿七日松岡御家中屋舗を毛屋え移東裏町斗」⁽¹³⁾とあり、松岡藩士が享保16年7月27日に毛矢東裏町へ移っている。さらに「享保十九寅年 一、同去年より是年迄松岡屋舗を毛屋え移、今言ニ中町一」⁽¹⁴⁾とあることから、享保18年（1733）～19年（1734）の間に毛矢中町へ移っていることがわかる。つまり、毛矢町への引越は数回に分けて行われており、享保16年に毛矢東裏町へ引越をしたこと、2年後の享保18年～19年の間に毛矢中町へ移っていることがわかる。

そして、同じ『続片聾記』の元文4年（1739）10月の記述に「元文四未年 一、同十月十一日此頃迄に松岡屋舗不残引越毛屋西片側町新屋敷建」⁽¹⁵⁾とあり、元文4年までに松岡藩士はすべて毛矢西片側町あるいは新設された新屋敷に移されたことがわかる。

これら数年にわたる引越については、屋敷地ごとの所有者が江戸時代を通して記されている先掲の『転宅考』（天保2年）でも確認できる。毛矢中町の蜷川七郎兵衛は「毛屋中通り西表 今雨森 享保十七 蜷川七郎兵衛代々」と記され、茂木清太夫は「今本儀 享保十七 茂木清太夫」、山本庄七は「今松沢 享保十七 山本庄七」とあり、蜷川七郎兵衛や茂木清太夫が松岡から毛矢中町に移った時期は、併合から11年経過した享保17年で、前述した『続片聾記』の記述と合致している。

毛矢片側町についても、『転宅考』に「毛屋片側町 西表 今蓮川 元文四 土屋小弥太」や「今 木内 元文四 沢木所右衛門」、「今中山 元文四 内海道安」とあることから、毛矢片側町への引越は毛矢中町より7年後の元文4年である。こちらも『続片聾記』の記述と一致する。

3.2.2. 新屋敷

新屋敷についても毛矢町同様、『転宅考』に「新屋敷 東表 今芦田 享保八 明石縫殿」、「今村田 享保八 河合彦作」、「今前田 享保八 前田道通代々」とあり、新屋敷①区への引越は毛矢町よりも早く、併合直後の享保8年（1723）であったことがわかる。但し、新屋敷③区と④区については、③区の蘭田七郎が屋敷地を拝領した

のは享保14年(1729)で、同じ③区の永田忠四郎は享保12年(1727)である。そして、④区の上坂利右衛門は享保13年(1728)、伴権太夫は享保14年である。したがって、新屋敷への引越は5～6年の間になされたことが指摘できる。

一方、東光寺町は同じ『転宅考』に中村弟蔵が元文5年(1740)、武沢条助が享保19年(1742)と記されており、東光寺町への引越は新屋敷よりも2～3年遅かったと思われる。さらに、奥東光寺町の町田藤右衛門と石沢忠右衛門、岩城庄八はいずれも享保16年(1731)に移住していることが確認できる。

3.2.3. その他

毛矢町と新屋敷のほか、城下中心部の御泉水町の渋谷家と磯野家の移住時期についても『転宅考』に「宝永五御用地に成り御泉水ノ内入り 享保十一八月ヨリ再侍屋舗ト成り」とあり、両家とも享保11年(1726)に御泉水町に移住していることがわかる。この時期の御泉水邸は、正徳元年(1711)の福井藩7代藩主吉品の死去に伴って敷地が縮小されて西側部分が武家屋敷地に戻されている⁽¹⁶⁾。したがって、武家屋敷地に戻された屋敷地を番外上位の渋谷家と磯野家が拝領した可能性が高い。

4. 松岡藩併合による武家屋敷地の移変について

図2は、貞享3年の大法後に明地(赤色)、地方地(橙色)、畑地(緑色)に変わった屋敷地を正徳4年の『御城下之図』⁽¹⁷⁾(以後、『正徳絵図』)に色分けして示したものである。また、正徳4年時の明地数や地方地、畑地および享保6年以降の松岡藩士の移住先を町別に示したものが表2である。

表2 町別にみた正徳4年時の明地数と享保6年の併合以降、移住者の屋敷数

年代 区画	正徳4年 (1714)	享保6年以降 (1712～)			
	明地	番外	番組	その他	
北二ノ丸	1				
東二ノ丸					
南三ノ丸					
西三ノ丸					
北三ノ丸					
東三ノ丸	1				
西外郭					
大名町					
下馬門前					
漆門内					
木蔵町					
新築地					
柳門前					
土居ノ内		1			
神明前		1			
御泉水町		2			
元御泉水町	3				
天王町	2				
八軒町	1				
三ノ丸鷹冷場					
鷹匠町					
上江戸町	1				
中江戸町					
下江戸町					
御使番町					

年代 区画	正徳4年 (1714)	享保6年以降 (1712～)			
	明地	番外	番組	その他	
天草町	2				
永平寺町		1			
観音町					
餌刺町	3				
竹ノ鼻					
中ノ馬場	1				
元割場					
鶴匠町					
城ノ橋	2		3	1	
東光寺			3		
奥東光寺町			5		
新屋敷①	地方地	13	10	3	
新屋敷②			13	1	
新屋敷③		1	6	1	
新屋敷④			5		
新屋敷⑤		1			
新屋敷⑥		1	2		
新屋敷			2		
毛矢町	畑地	13	30	4	
橋北地区	7				
橋南地区	地方地				
合計	24	34	79	10	(筆)

4.1. 屋敷地の変容

既報⁽¹⁸⁾のように、赤色で示した明地は24筆あり、城下周辺部の北から東南にかけて点在している。町別にみると、城下中心部の北二ノ丸と東三ノ丸に1筆ずつあり、本丸の東北方の元御泉水町に3筆、天王町に2筆、八軒町に1筆、上江戸町に1筆、天草町に2筆、餌指町に3筆と、東南の中ノ馬場に1筆と城ノ橋に2筆の計17筆確認できる。それ以外の7筆は、いずれも城下の外側にみられる(表2参照)。

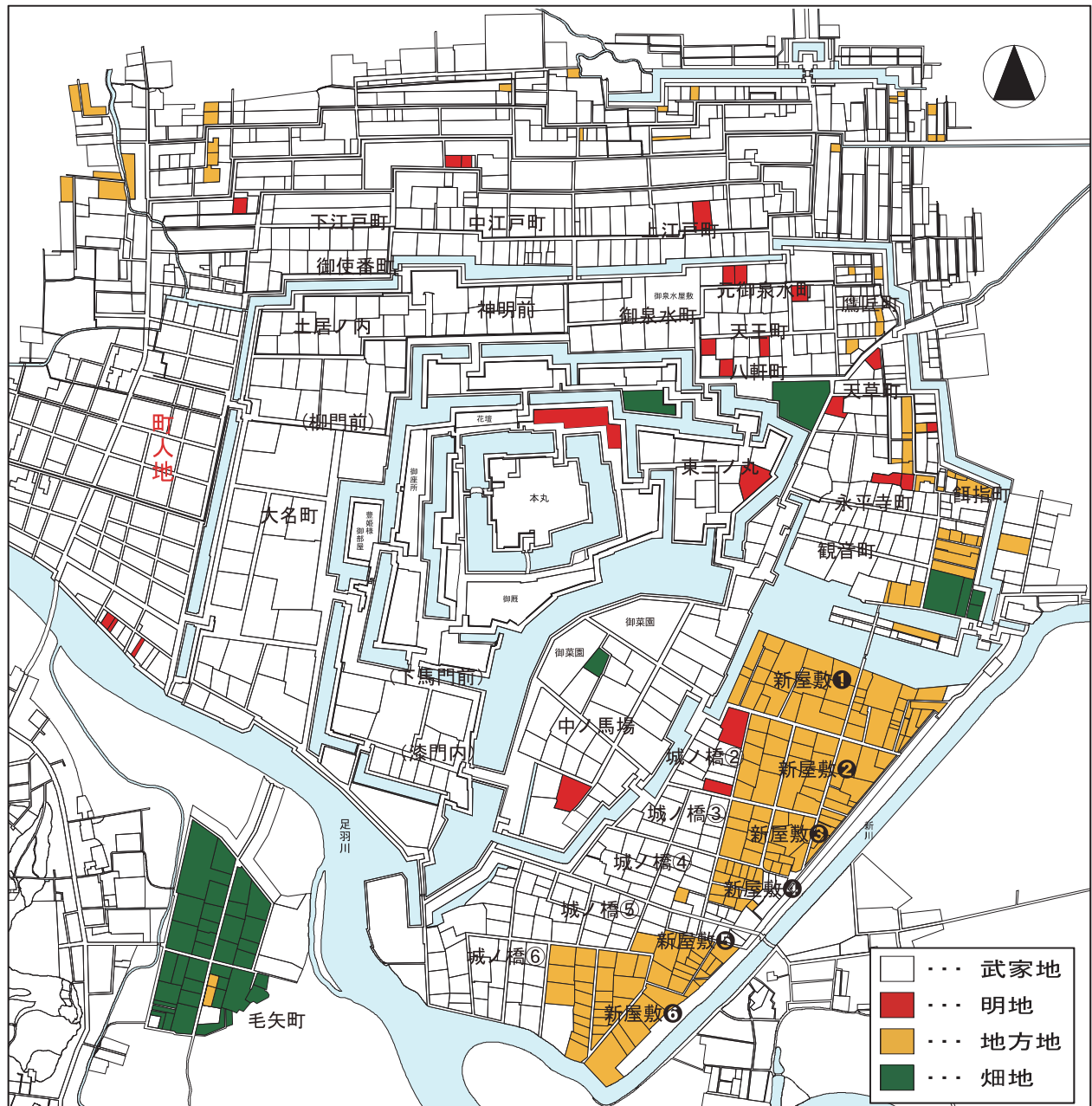


図2 明地や地方地、畑地になった屋敷地（正徳4年）

（貞享2年の『御福居城下絵図』の屋敷割の状態に、変化した正徳4年の状態を重ねた）

このうち、松岡藩士の移住先と重なっている明地は、毛矢町の畑地や新屋敷の地方地のみで、それ以外の明地は合致しない。したがって、松岡藩士の移住先は広い敷地が確保でき、纏まった明地があった毛矢町と新屋敷が選ばれたと考えられる。表2をみると、正徳4年時に新屋敷①区～⑥区のほぼ全域を占めていた地方地が、享保6年以降の松岡藩士の移住に伴って再び武家屋敷地に戻っている。なかでも、①区のみ旧松岡藩の上級にあたる番外の屋敷地が集中していること、対して番組の屋敷地は全区域に点在しているが、①区が10筆、②区が13筆と多いこと、城ノ橋や東光寺町、奥東光寺町はすべて番組の屋敷地であったことなどが指摘できる。

橋南の毛矢町も正徳期に畑地であった区域が、新屋敷同様、松岡藩士の移住によって武家町に再興している。毛矢町の特徴は、松岡時代に比較的高禄であった番外（13筆）と番組（30筆）が多く配されている。特に北側（本丸方面）の区域は250石の中川主膳をはじめ200石の生駒四郎左衛門、同じ200石の蜷川七郎兵衛など番外上位の家が集まっている。

これ以外、城下中心部の土居ノ内（中根鞆負）、神明前（雨森傳右衛門）、御泉水町（渋谷弥祝・磯野多宮）の各町とも高禄でかつ家老級の中根家など4家が拝領している。いずれの屋敷地も正徳4年の図2においては、明地でないことが認められ、橋北の上級武家屋敷町に関しては、正徳期の明地と松岡から移住者の屋敷地が合致する屋敷地は1筆もみられない。

5. おわりに

以上、享保6年の松岡藩併合に伴う武家屋敷地の変動について検討した結果、移住先が特定できた旧松岡藩士は番外21名、番組80名、医師・諸役10名の計111名であり、番外の4名を除く107名はすべて城東地区の新屋敷、城ノ橋、東光寺町および橋南の毛矢町に移住していたこと、移住に要した期間は享保8年から元文4年の間のおおよそ16年かかったことなどが指摘できる。また、移住者に与えられた屋敷地は、貞享の大法によって明地になった屋敷地とは1筆も合致しないことも明らかにできた。

注

- (1) 福井県立図書館、福井県郷土誌懇談会共編，“国事叢記 上”，(1961)，p.270，貞享3年3月3日条，によると，貞享3年(1686)に福井藩は25万石に半知されている。その際，1000人余の藩士が禄を失い，福井城下の武家屋敷地の多くは空き地となっている。
- (2) 福井県立図書館、福井県郷土誌懇談会共編，“片聾記・続片聾記”，(1955)，p.658，享保6年12月11日条，福井県立図書館，によると，享保6年(1721)12月に，松岡藩主昌平が宗昌と改名して福井藩を相続し9代藩主となった結果，松岡藩士も昌平とともに福井城下へ移り住んでいる。
- (3) 伊豆蔵庫喜，吉田純一，“貞享の大法に伴う武家屋敷地の変動”，福井工業大学研究紀要，Vol.46，(2016)，参照。
- (4) 野村英一，“松岡町史 上巻”，(1978)，pp.208-223，所収，松岡町。
- (5) 前掲4，“松岡町史 上巻”，参照。
- (6) “御城下絵図”，松平文庫，福井県立図書館保管。
- (7) “福井分間之図”，松平文庫，福井県立図書館保管。
- (8) 松平文庫，福井県立図書館保管。大谷氏信，“御家中転宅考”，天保2年(1831)，00463 p10
- (9) 本研究においての城ノ橋と新屋敷の区分は，貞享3年の大法後に地方地や明地にならなかった城ノ橋地区の中央から西側にかけての武家地を城ノ橋とし，享保6年以降の松岡藩士の移住によって再興された東側および東南部の武家地を新屋敷とした。
- (10) 福井県立図書館，福井県郷土誌懇談会共編，“続片聾記 上”，(1955)，福井県立図書館。
- (11) 前掲10，p.662。
- (12) 前掲10，p.664。
- (13) 前掲10，p.666。
- (14) 前掲10，p.668。
- (15) 前掲10，p.672。
- (16) 三上一夫校訂，“越藩史略”，(1975) p428，享保11年5月15日「是日新泉水第を旧第に併せ移す」、同24日「是日新第の地を以て士家となす」とある，歴史図書社。
- (17) “御城下之絵図”，松平文庫，福井県立図書館保管。
- (18) 前掲3と同じ

(平成29年3月31日受理)